

好転

僕ら演劇部の公演は今日、文化祭一日目の初っ端。梨沙を除き、僕らは地下の部室で公演前の最後の発声練習、衣装チェックを黙々と行っていた。その時、がちりとドアの開く音。

「おはよう！みんな。昨日はよく眠れたかな？」

青原梨沙は部室に入るなり、答えの決まりきった問いを聞いてきた。

凧、晴奈、千景、海斗、飛輪は各々食い気味に言った。

「寝れるわけじゃないじゃん！」

当たり前だけど、寝れるわけないのだ。昨日の意気込みがまるで嘘のようだった。今日の演劇にこれからの演劇部の命運全てがかかっている。ましてや、弱小演劇部が文化祭という大舞台で公演をするなど、全くの初の試みなのだ。ドクンドクンと心臓は今にも飛び出そうだ。緊張しない方がおかしい。

「あっははは」

何が面白くて、梨沙は腹を抱えて笑っているのだろうか。そう思うと同時に、晴奈は梨沙の目の下にうつすらと隈ができているのに気がついていった。

「ごめんごめん。みんなこの世の終わりみたいな顔して言うからさ、つい面白くて」

まだ、梨沙はケラケラと笑っている。

「ていうか、梨沙がこういう大事な集まりに遅れるのって珍しくね？梨沙こそ本当に寝坊したんじゃない？」

海斗は自分と同類の人を見つけたという淡い期待を抱いたが、それは易々と打ち砕かれた。

「違うに決まってるじゃん、海斗じゃあるまいし。生徒会に挨拶に行ってたんだ、今日の公演見に来てくださいって」

梨沙の目はもう笑っていなかった。真剣な、燃える眼差しだった。一同、息を呑む。

「大丈夫、私たちは誰より練習してきたよ。きつと、ううん、絶対。絶対、うまくいく」
梨沙の言葉には不思議と強い説得力があった。

「よし、あと開演まで一時間もない。円陣、組もう」

主役を演じる飛輪に促され僕らは円になって手を重ね合わせた。

「じゃあ、挨拶は…風よろしく!」

「僕!?!わ、わかった」

スー、ハー。深呼吸を一つ。どうか、演技が成功しますように。そして、部が存続しますように。

「絶対、廃部にならない!自分を、僕らを信じろ、一致団結!」

勢いよく手を振り上げる。

「一致団結!」

開演まで残り四十分を切った。

「こんにちはー!荻野原高校の文化祭にようこそお越しくできました!司会を務めるのはー」

舞台上で軽快な司会が挨拶をする中、舞台袖で千景はブツブツと呟いていた。

「手のひらに人って書いて飲む…手のひらに人って書いて飲む」

小刻みに震える指を握る。空気ばかり飲み込んでしまつて苦しくなってきた。舞台は、もうすぐそこ。他の仲間を見ると、皆それぞれの方法で緊張を紛らわしている。先ほどのリサの言葉を思い出す。大丈夫。

「それでは、演劇部の皆さん、どうぞ!」

幕が、一定のスピードで上がっていく。

照明を担当する風と梨沙は別の場所から舞台の様子を見守っていた。

この物語は一人の少年を中心にした激動物語である。主人公の少年、理央は幼い頃からピアノが大好きで、将来の夢はピアニストであった。それに加え、頭も良かったので、普通の人の何倍も早くさまざまな曲を覚えた。そんな理央の天性の才能を理央の両親は過信し、理央が中学生の時、理央をテレビに出演させた。それから瞬く間に有名になったが、理央はピアノ漬けの日々になる。

『お父さん、お母さん、俺もうピアノ辞めたい』

飛輪にも同じような経験があった。テレビや雑誌により一躍有名になった時、テレビや周囲の期待に応えることに必死でいつも大きなプレッシャーを感じていた。しかし、打ち明けても、有名になった手前、簡単に辞めることは許されない。

飛輪は青く、沈んだスポットライトに照らされる。

『誰も本当の僕のことを知らない。本当の僕を見ようとしな。ピアノをしない僕なんて価値がないんだ』

飛輪は心底理央に感情移入ができた。繊細で、複雑に絡まった心の表現をここ数ヶ月練習してきた。

理央は一層ピアノの練習に心血を注ぐようになる。時は経ち、中学三年になる頃には全国の様々なコンクールで活躍するようになっていた。毎日が忙しく過ぎていく。

そんな時、ピアノのレッスンに通う道中、疲労で限界だった理央は、赤信号に気づかず交通事故に遭い、両耳が聞こえなくなってしまう。テレビでも大々的に取り上げられ、理央の両親はバッシングを受けた。

『こんなことになるまで、どうして俺は理央に無理をさせたんだ……俺の、大馬鹿者がっ！』

理央の病室の外、父親が今までの行いを悔やむシーン。海斗は父親という、親や大人ならではの心情表現が難しいと感じていた。しかし、理央の父親も一人の人間である。大切な人が自分のせいで酷い目にあったなら、抱く気持ちは共通であるはずだ。

理央の父親は激しく後悔し、握り拳を自らの頭にぶつける。

観客はもはや演劇を見ている感覚ではない。流れる涙、顔、語気、全てが本物だった。

青原梨沙は、海斗の成長速度に驚かざるを得なかった。喧嘩した時とは比べ物にならない表現力。梨沙は観客のそれとは違う意味で自然と涙が出ていた。

『もう、理央はピアノをやめるべきだと思うわ。私は、一番近くで理央のことを見てきて知ってる。最近の理央はピアノを弾いている時、全然楽しそうじゃない。今回の事故で、体力の限界だったことも分かったはずよ』

震え、怒りを含んだ声で理央の姉、遙は言う。遙は普段物静かで強く意見を主張することは滅多にないので、理央の父親は驚き、事の重大さを改めて感じる。

『ピアノなんか、もうどうでも良いわ。私は理央がしたいことをして楽しそうにしているのが良い』

晴奈も自分の感情をあまり表に出すタイプではないため、強く込められた感情を意識して、真剣に伝えることを努力した。

遙の抗議も虚しく、耳の聞こえない理央には届かない。一人病室の中、姉と父親がきつと自分のことで揉めているんだろうかと理央は思う。耳が聞こえないなら、もうピアノはできないのかな。もうずっと嫌だったはずのピアノ。ずっと自分を縛り付けてきたピアノ。しかし、こんな時も理央の脳内に流れてくるのはピアノの音色であった。

『もう、どうしたらいいんだよ…』

ズビズビ。姉と父親が帰った後、病院のベッドで声を押し殺して号泣する理央。

ガラガラ。そこに、中学生ぐらいの少年がこそそと入ってきた。

『音谷理央さんですか？小さい頃からずっとファンです』

そう書かれたスケッチブックを持った少年は理央の腫れた目を目を見ると、ペコペコと頭を下げ、慌てて去ろうとする。

『うん、音谷理央。待って、帰らないで。会いにきてくれてありがとう。少し話をしたいな。いつから俺のファンなの？』

理央は慌てて近くに置かれた筆談具をとりサラサラと書く。

『六歳の時からファンです。僕は昔から体が弱くて、入退院を繰り返しています。病院で何度も心細い時があったけど、テレビであなたの演奏を聴いて、いつか僕もこんなふうにピアノを弾きたいって思いました』

オドオドしていて、でも真っ直ぐで純粋な意志を持っているところが千景とこの少年は見事にマッチしている。演技で緊張しているのではなく、きちんとキャラクターに合わせた自然な立ち居振る舞いができていると、凧は一人感心した。

『でも、ほら、もう僕は耳が聞こえなくなっちゃったし、ファンとしては失望しちゃうよね』

そんな理央の発言に少年は少しムツとしてわかりやすくサラサラの茶髪の髪を靡かせ、首を横に振ってみせた。

『そんな訳ありません。僕は理央さんのピアノにも憧れましたが、理央さんの努力家で、気取らず、誠実で真摯にピアノに向き合う姿に憧れました。ピアノが弾けなくなつて、僕はあなたのファンの一人です』

少年は背を向けて、理央に黒のマッキーを差し出す。

『だから、ここにサインお願いします！』

理央は自分の中で蟠っていた、自分の存在を初めて肯定された気がした。笑って、理央は涙を誤魔化した。

観客席の方から鼻を吸る音が聞こえる。手を固く握る人やハンカチで目を押さえる人も。リアルで、些細な表現に涙を禁じ得なかった。

その後、理央と少年は毎日のように会うようになる。理央はしだいにピアノが大好きだった頃を思い出し、自らの意志を持ってピアノを弾くようになる。音は聞こえないが、頭の中で音を生感することは理央には簡単なことだった。やはり理央にとってピアノは離れることのできないもので、理央はピアニストになることを再度決意する。

『父さん、母さん、姉ちゃん、今の俺の夢はピアニストになることです。難聴の俺がピアニストになって、ピアノに憧れる全世界の人を勇気づける存在になりたいです』

それから、理央は高校生、大学生と数々のコンクールに出場して華々しい成績を収める。ピアノの練習は昔よりはるかに厳しいものになったが、理央は苦に思わなくなっていた。理央は若き難聴ピアニストとして世界中の人々を勇気付ける存在となった。

観客席の方から一斉に拍手が浴びせられる。中にはハンカチで鼻と口を覆う人やスタンディングオベーションをする人も。梨沙と凧ももらい泣き。

飛輪、海斗、晴奈、千景は満足感でいっぱいだった。拍手はしばらく鳴り止まなかった。

「最後までありがとうございました！」

声を合わせ、四人はステージの上で深々とお辞儀をし、幕は閉じた。

そうして僕らの初文化祭公演は終了した。文化祭も終わると凧たちにはまた普段の生活が戻ってくる。しかし、この日僕らは朝から帰りのホームルームまでずっと浮き足立っていた。なぜなら今日、お客動員数ランキングが記された封筒が放課後に公演部門で公演した部の各部室に届けられるのだ。そして、一位だった部活は次の日の朝礼で全校生徒の前で表彰状をもらう。つまり、演劇部の部が存続するか否かが今日、決定するのだ。

「はい、じゃあ日直さん、号令お願いします」

「気をつけー、れー」

覇気の無い担任と眠そうな日直とは反対に、号令が終わると凧は一目散に地下の部室へ向かった。

コンコン。

「生徒会です。演劇部の皆さん、お客動員数ランキングの封筒を持ってきました」

部員一同、勢いよく振り返り、ドアを見る。現れたのは前にうちの部に布告をしにきた生徒会役員の人だった。梨沙が恐る恐る封筒を受け取る。

「みんな、覚悟はいい？」

飛輪、海斗、晴奈、千景、凧はそれぞれ顔を見合って、祈り、深く頷いた。

「じゃあ、開けるよ…」

手が震えて、封を開けるのに時間がかかった。部員全員が固唾を飲んで見守る。静寂の中、皆が紙の文字を確認する。

折り畳まれた白い紙を広げると、おめでとうの文字とともに大きく一位と書かれていた。

その瞬間、飛輪と海斗は抱擁を交わした。晴奈は口を手で覆って、信じられないといった様子。千景はその場で力が抜けてへなへなと座る。凧は内心ガッツポーズをしながらも笑って頷き余裕を見せ、反対に梨沙は涙を流し、声まで出して泣き始めた。梨沙が落ち着くと、六人は円になって肩を抱き合った。

「やっぱりなり、まあ？俺は？一位以外あり得ないと思ってたけどねー」

海斗は顎を触りながら、満面の笑みで言う。

「いや、一番心配してたの海斗じゃん。『俺うまくできたかな…』って」

梨沙は鼻を吸りながらバツサリと切り捨てる。

「おおい！そんなこと言って無い！断じて！！てか、さっきの今まで一番泣いてたの梨沙だろ！」
ワハハと僕たちは笑い転げる。

ゴホン。

一同静まり返る。生徒会の人が咳払いをする。どうやらまだ何か話があるらしい。

「まだ何か用ですか？一位取りましたし、もう僕ら演劇部に干渉してこないでください」

飛輪が言い放つと、生徒会の人バツが悪そうにもじもじする。演劇部一同が頭にはてなを浮かべると、意を決したように言った。

「演劇部の公演、見に行きました：ストーリーがとても良くて、かつこよくて気がついたら泣いてしまっていました。私個人の意見でも、演劇部は存続してほしいなっていました。それで：私も演劇部に入部したいなっていました：」

俯いて、耳まで赤らめて生徒会の人、改め赤部花織さんは言う。予想外の展開に皆目をパチクリさせるが、答えは一つ。

「もちろん、喜んで！」

梨沙は笑みを浮かべて即答。こうして、演劇部は存続し、一人の新メンバーを加えて新しい風が吹き始めていた。